

200人を超える職人集団を擁する平成建設 “グッドデザイン賞”を2部門で受賞 「帆船[クレオパトラ号]」「森を育む丘の家」

株式会社平成建設は、建築大工による木造帆船の大規模レストア「帆船[クレオパトラ号]」（モビリティ部門・別紙1）と町の成長や豊かさに寄与する風景をつくる「森を育む丘の家」（住宅部門/設計：(株)OKDO・別紙2）が、このたび2023年度グッドデザイン賞を受賞しました。当社では今回の受賞を契機に大工や職人の復権を図るとともに、建築というものづくりにおけるデザインの活用を積極的に推進し、ブランドイメージの向上に努めてまいります。



モビリティ部門 帆船【クレオパトラ号】



住宅部門 森を育む丘の家
設計：(株)OKDO 木藤 美和子 写真：阿野 太一

グッドデザイン賞受賞展「GOOD DESIGN EXHIBITION 2023」に出展

本年10月25日(水)から東京ミッドタウンで開催される、受賞対象を紹介する展示イベント「2023年度グッドデザイン賞「GOOD DESIGN EXHIBITION 2023」」で、「帆船[クレオパトラ号]」と「森を育む丘の家」が本年度受賞デザインとして紹介されます。

GOOD DESIGN EXHIBITION 2023

会期：10月25日(水)～10月29日(日)

会場：東京ミッドタウン(東京都港区赤坂9-7-1) <https://promo.g-mark.org/>

グッドデザイン賞とは

1957年創設のグッドデザイン商品選定制度を継承する、日本を代表するデザインの評価とプロモーションの活動です。国内外の多くの企業や団体が参加する世界的なデザイン賞として、暮らしの質の向上を図るとともに、社会の課題やテーマの解決にデザインを活かすことを目的に、毎年実施されています。受賞のシンボルである「Gマーク」は優れたデザインの象徴として広く親しまれています。

<https://www.g-mark.org/>



※帆船[クレオパトラ号]、森を育む丘の家 の写真データを用意しています。下記お問い合わせ先までご請求ください。

このプレスリリースに関するお問い合わせ先

株式会社平成建設 広報担当：安藤 受賞作品担当：須田 TEL：055-962-1000

平成建設ウェブサイト <https://www.heiseikensetu.co.jp/>

「帆船[クレオパトラ号]」グッドデザイン賞 受賞

— 現代大工が挑む、失われつつある「技術」と「財産」の復活 —

1) 概要

建築大工による木造帆船の大規模レストア。船内はチーク材を随所に使用した歴史を感じる優雅な空間。船体の美しい曲線と佇まいが魅力の本格的なクラシック木造帆船「クレオパトラ号」。船齢43年を迎え、腐食衰耗による経年劣化等により、航行困難となっていたこの帆船の修繕に建築大工が挑み、「ヴィンテージ」の魅力と技術を後世へと繋ぐ。

クレオパトラ号は二本のマストを持つケッチ型と呼ばれ、海外ではクラシックヨットとしても人気が高いが、日本では珍しい帆船。レストアするためには様々な知識や技術が必要とされていたものの、現存する木造帆船の減少、木部の修繕の担い手である技術者の不足も相まって、水や風の抵抗を考慮した曲面を用いた木工技術は失われつつある。さらに16m以上の主要木部の修繕を伴う、大規模レストアを受け入れ可能な技術集団は限られてきている。そんな中、木部と金物のレストアを「建築工程の内製化」を掲げる建築会社の現代大工たちが引き受けた。構造から内装や家具、防水シーリングまで狭い空間での作業でありながら、プロのマリン業者と連携してレストアを実施。自然と広がる人脈により専門業者と他業者が交錯し、エレガンスをテーマとしたクルーザーとして現代へと蘇らせた。

2) 評価のポイント — 審査員のコメント

急速に数を減らしつつある木造船。理由のひとつに修理のできる船大工の減少と高齢化があるという。その状況を打破するために、同じ木を扱う港町の建設会社が立ち上がったというストーリー、技術の伝承や職人の育成を挑戦の理由として挙げた点に共感した。腐食が進行していたマストは、ボルトが木を貫通していたことが原因であることから金具が木を抱き込む形状に改めるなど、家づくりの経験を投入。島国である日本に船は必要不可欠であり、住宅では木造が主力であり続けている。だからこそ木造船という文化を次世代に継承していく取り組みは評価したい。



「森を育む丘の家」グッドデザイン賞 受賞

—— 町の成長や豊かさに寄与する風景をつくりたい ——

設計：㈱OKDO 木藤 美和子

1) 概要

静岡県某所にある区画整理事業地の一角に、丘のような住宅を設計した。

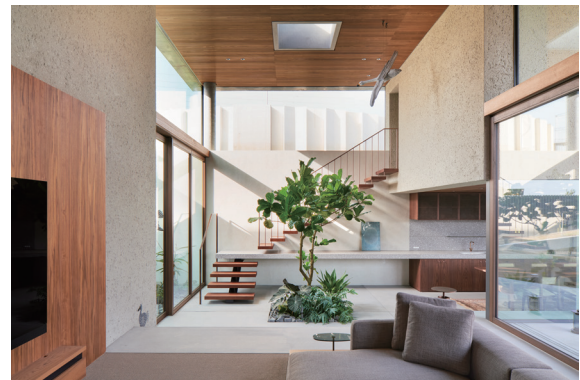
森を切り拓いて作られた敷地周辺には、設計当初は街路樹や公園などの緑が一切なく、人工的な風景が続いていた。新興街区に建ち始めた建築は配置も高さもバラバラでとりとめがなく、町並みとして目指す方向が定まっていなかったように見えた。私達はこの場所に、町の成長や豊かさに寄与するような、そんな風景を作りたいと考えた。

住み手は、人間と犬が垣根なく快適に共存できる空間を求めている。

まず敷地の高低差を利用して丘状の地盤を設計し、地盤内に「外部のように開放的な内部空間」や「内部のように落ち着く外部空間」を作ることで、屋内と屋外の境界を曖昧にした。つぎに敷地の気候環境を丁寧に検証し、空調システムに頼らなくても快適で、四季の移ろいを愛おしみながら生活できるように設計を進めた。敷地境界を塀で囲わずに緩やかに繋げたことで、住宅内から眺める空はおおらかに広がり、道行く人々は豊かな緑を享受する。こうして、一般的には公共性の希薄な住宅に、町との良好な関係性を生み出した。この丘のような建築は大地のように力強く存続し、長い年月をかけて木々を育む。木々が成長して丘が小さな森となり、この街の拠り所のひとつとして愛され続けることを願っている。

2) 評価のポイント — 審査員のコメント

非常にのびやかな住宅である。屋上緑化された屋根と庭の樹木が、緑の少ない周辺環境に潤いを与えている。丘のような屋根と緑がプライバシーを守り、塀を作らずに町と住宅を繋げているのも良い。丘のような屋根は犬と人間が共存するプラットフォームにもなっているようだ。屋根の下では外部空間と内部空間がシームレスに繋がる。外部のような開放的な内部空間と、内部のような落ち着きのある外部空間が相乗して気持ち良さそうな住まいである。内部空間も自然素材を多用しながら丁寧にデザインされているのが窺える。



ウェブサイトでの紹介 <https://www.heiseikensetu.co.jp/information/company/gooddesignaward2023/>

写真：阿野 太一